



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.230

2022.11.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— 山内清男生誕120周年に向けて —

鈴木 正博

### ● 第48回 ● 加曾利B式3「細別」の真相

西村正衛の御下問を契機とする山内清男の加曾利B式2「細別」への着目以降、屢々2「細別」と3「細別」を混乱した山内清男門下での口伝が「共通誤認識」(個別多様性から帰納的に淘汰される蓄積型研究ではなく、共通の場における忖度や蒙昧、願望により誤認と知らずに演繹的に受容される通説型口伝・記載)を生み都市伝説の如く流布する状況と遭遇する。その代表例が広畑貝塚の「第一類土器」を「加曾利B2式」と誤認する口伝等に尽きる。この「共通誤認識」は、2「細別」時の「加曾利B2式」相当概念をそのまま3「細別」時でも「加曾利B2式」と継承することになり、周知の通り「加曾利B3式」の実態を大きく歪める。その弊害は概説書等も巻き込み1970年代まで長く影響・混乱し続け、更には独立した層位である「曾谷式」研究にも齟齬を与えてしまう。

このような「共通誤認識」を排除し、加曾利B式3「細別」へと進展する過程、及び新たに制定された「曾谷式」と対峙することにより、即座に「加曾利B3式」から「曾谷1・2・3・4式」への精確な文様帯変遷推移(SD法的出現順序)も導出される(鈴木正博(1980)「曾谷式」生成論序説「古代探叢」)。

畢竟、加曾利B式「細別」は層位別を単位とする新旧の2「細別」を経ずしての3「細別」進展プロセスは有り得ず、その思考回路は正に原理的接近法である「類似度順序形態学」が彷彿とする。

他方で山内清男の加曾利B式「細別」研究とは別に、発掘者でもある人類学教室講師の八幡一郎も加曾利B式の普及に勤むが、そこには概念の拡大解釈という陥穽も潜んでおり、見過ごす訳にはいかない。昭和9年の「堀之内式の古いもの新しいもの」と加曾利B式との弁別は飽くまで山内清男に限る成果であり、必ずしも発掘者間の共通認識には至らない。八幡一郎は昭和13年に加曾利B式土器とその文化を全国規模で紹介する機会を得、第51図等で具体的な標本等の解説に至る(八幡一郎(1938)「四.原始文化の遺物 縄紋式文化」『新修 日本文化史大系 第一巻原始文化』、誠文堂新光社)が、「堀之内2

式」との弁別に全国的な混乱を招いた原点となる。この八幡一郎の誤認を間近で知る山内清男は、関東地方の地点別層位別「土器型式」標本の重要性に喫緊の課題を認識し、翌年には『日本先史土器図譜』初版・ガリ版袋入の刊行を開始する。

さて、加曾利B式提唱と「細別」研究の初期、略同時に顕現する杉山寿栄男の層位を伴わない「大森式」や八幡一郎の誤認による混乱には巻き込まれることなく、山内清男の「大森式」認識を経て加曾利B式2「細別」への「細別」原理と対峙し、遂には3「細別」へ至る進展を迫認する。

先ずは昭和12年2月「縄紋土器型式の大別と細別」の最新・最後となる2「細別」編年からその意義を導出する。新旧の2「細別」の頃、明確な地点別層位別を代表するのは、既に触れた廻戸貝塚・中妻貝塚の「加曾利B式(古いもの)」、及び広畑貝塚の「加曾利B式(新しいもの)」である。前者の形態・装飾は「堀之内式の新しいもの」に近い「小突起付(小波状口縁)深鉢」とその文様帯(第21図・26図等参照)が特徴的であり、後者の夫れは「安行1式」に近い「体部で分立する大波状口縁深鉢」とその形制(第50図参照)を特徴とする。

この加曾利B式2「細別」が年代区分となり、順次新たな層位が導出される。第一は山内清男による下総・曾谷貝塚の発掘調査であり、その成果は「原始文化研究会」最後となる昭和11年12月17日例会で早々に大町四郎「千葉県岩井貝塚発掘の土器」、山内清男「千葉県曾谷貝塚発掘談」と連携した発表がなされる。曾谷貝塚で

は竅穴住居址覆土層(「安行1式」)の下となる床面から、「加曾利B式(新しいもの)」(広畑貝塚「第一類土器」)よりも「安行1式」により近い「大波状口縁深鉢」が検出されており(奈良文化財研究所(1996)『曾谷貝塚資料 山内清男考古資料7』)、昭和12年2月刊行の「縄紋土器型式の大別と大別」(『先史考古学』第1巻第1号)では「又私は真福寺貝塚の資料によって不明の一型式の存在を予想したが、最近下総曾谷貝塚の発掘によって、この型式の全貌が明になった。」と解説され、昭和14年10月刊行の『日本先史土器図譜』初版・ガリ版袋入「第三輯」にて正式に「曾谷式」制定が紹介される。「真福寺貝塚の再吟味(昭和9年)の「型式別未だ疑問なもの」は「全貌が明」でない破片のみであり、曾谷貝塚の床面出土資料は形態と装飾の「全貌」が窺える「土器型式」の標本として優れた資料である。こうして「曾谷式」の層位が加曾利B式と「安行1式」の間に位置付けられる。

第二は昭和7年に大山史前学研究所が調査し、昭和12年に遺物報告される下総・遠部遺蹟(包含地と小貝塚3地点)への注目である(池上啓介(1937)「千葉県印旛郡白井町遠部石器時代遺蹟の遺物」『史前学雑誌』第9巻第3号)。特に遠部遺蹟包含地出土の極めて纏まりの良い土器群(以下、包含地を省略)は2「細別」には含まれず、かつその前後何れの層位とも異なることから、2「細別」の中間に位置付けられ、廻戸貝塚・中妻貝塚→遠部遺蹟→広畑貝塚の地点別層位別変遷が描定されて『日本先史土器図譜』による加曾利B式3「細別」へと進展する。

では、2「細別」の「小突起付(小波状口縁)深鉢」→「体部で分立する大波状口縁深鉢」という形態学的不連続は、2「細別」の中間に遠部台遺蹟が挿入されることで解消されたのであろうか。否、遠部台遺蹟も「体部で分立する大波状口縁深鉢」を特徴とすることから、廻戸貝塚・中妻貝塚→遠部遺蹟への変遷にも同様に形態学的不連続が顕著に認められ、それ故に『日本先史土器図譜』の図版掲載順序にはこの課題解決も企図する構成が髣髴とする。



▲第51図：八幡一郎(1938)「関東発見の加曾利B式土器」

\*巻頭連載は隔月です。今回は大村裕さんです。

## 目次

■加曾利B式土器 加曾利B式3「細別」の真相(第48回) 鈴木正博 …1  
■考古学の履歴書 ことのはじまり(最終回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第223回) 齊藤麻那 …3  
■考古学者の書棚「縄文人は海を越えたか?」 鯉淵義紀 …4

## 考古学の履歴書

## ことのはじまりー「..それでは 何だ」(最終回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

## 8. 奈良三彩薬壺形土器の大と小(5)

先回の最後になって、名前が出てきた葛木戸主は、聖武天皇の遺品を、東大寺に献納した帳簿に署名を記載するほどの立場だった。他の署名人物は、当時の政界での著名人。むしろ戸主は、光明皇后署名の代理人としての立ち位置だったのでは。この時の役職は、藤原仲麻呂の配下ではあるが、後には彼は光明皇太后の宮殿付き役人になっている。

この人物の妻となったのは、和氣広虫。当時女性の成人とされた15才歳であったが、夫戸主の年齢は不明。前回記した京中の孤児10人を、戸主の里子にしたという記録の時には、広虫は27才になっている。彼女は孝謙天皇が上皇となって後に出家した時、共に出家している。戸主はその時には既に死亡していたと思われる。この時、彼女は33歳くらいで実子はなく、多くの養子・女が居た筈だ。夫とは年齢差も大きかったのでは。

この広虫と弟の清麻呂は和氣氏として知られるが、古代の著明氏族に並んで、和氣氏系図が残る(『讀史備要』参照)。垂仁天皇に始まり伝説部分を除くと、実名部分が4名。それは「佐波良 - 伎波豆 - 宿奈 - 平麻呂」で最後の人物が広虫と清麻呂の父なのである。この平麻呂から言えば、曾祖父まで。系譜を意識する家なら、普通に伝承される範囲であろう。

吉備の反乱と伝えられた事件の後、大和政権による地方支配の屯倉が置かれるなかで、特に、吉備地方の東半部では、鉄・塩生産が注目されて、児島屯倉や白猪屯倉が置かれてくる。大和勢力の中で、王家出身と自負したもので、地方に派遣され、その地での経営もし、地域の豪族となりながら、常に大和王家とも直接交渉があった、こうした地域豪族を生む時代になったともいえよう。備前東部の一角で台頭した、和氣氏もこうした一族だったのではなからうか。

備前から分離され、美作国となった地での、須恵質四注屋根家形陶棺という極めて特異な形態の棺に収められたのは、中央から派遣された、平麻呂の曾祖父「佐波良」だったのでは、その墓地は、勢力を伸ばしたであろう子孫にとっては、自分たち祖先の聖地。備前の地に住まいながらも、直接光明皇后などにも貢納品を納める機会があった平麻呂には、宮廷で働く戸主に、成人したばかりの賢い娘、広虫を嫁がす機会もあったのだろう。平麻呂は宮廷への奉仕も怠らなかつたことで、息子の清麻呂も、官人への道も開けたのではなからうか。かつての地方豪族からの舎人とか采女という関係でない、より私的なルートだったと言えよう。

一方で平麻呂も、都の滞在も多くなり、都で死亡した。宮廷内でも彼は知られており、戸主の一族として、奈良三彩の骨壺が送られたのではないかと、想像した。こうした骨臓器が極めて少ないことから、内廷における特別な場合のみの用途で、王者の身近な者で、地方出身者ながらよく仕えた者に対する、王者の私的な褒章によるものに思えてならない。

和氣氏の場合は、平麻呂の平素の思いに従い、三彩壺に収められた彼の骨は、誇るべき祖先の陶棺に収められて、祖先祭祀も行われた。陶棺内には古くから複数埋葬も多い。

一方奈良三彩薬壺形小壺の方も、時の宮廷に近い人物が、海外派遣とか地方への派遣、諸々の理由で去る際、宮廷からの下賜品として個人に贈られたのでは。内容物は正倉院にも納められた薬の一部とか、香料、その加工品、稀にはガラス玉や金箔など入った、いわゆる身に換える「守り物」的な意図での贈り物だった

のでは。そのため三彩小壺は祭祀に関係しながらも、随意で個人的な使用のされ方をしている。

ところで、764年、仲麻呂の反乱の際には、正倉院内の弓矢まで使用される事態だったが、平定されてみると、広虫にとっては、かつては夫の仕事仲間やその一族が、当人たちの意思にかかわらず、反逆者として殺されようとしている。広虫はその不合理さを思い、必死で止めたのであろう。375名の助命も、83名の孤児の引き取りも事実であろう。翌年には再度女帝が位につき、称徳天皇となる(『続日本紀』等)。

少なくとも二回にわたり、広虫達に引き取られた多くの孤児たちは、不安な奈良の都でなく、清麻呂・広虫の故郷の一角で、しかるべき家の養子・養女や、自立が計られたのでは。すぐ近くにそびえる備前では最高の熊山山頂には、孤児たちの思いも込めて、東大寺近くの頭塔をモデルにした石組みを築き、戸主を父とし、彼に捧げられた中心的な石積塔には、奈良三彩などには最も近い地位にいた戸主の分骨を三彩小壺に納めて埋納し、祈った。これは多くの孤児たちの、祖先としての中心となり、広虫・清麻呂の里で自立しえた彼や彼女たちは、政争の中で失った親たちや知人への祈りも含めて、それぞれに大小はあっても、熊山の地に多くの石塔を次々に築いていったのだろう、と思えてならないのであった。

今回で終わります。本当に長い間、有難うございました。



写真は共に現在、岡山県和氣郡和氣町の歴史民俗資料館の展示品、清麻呂と広虫像。清麻呂像は石膏像、1941(昭和16)年、太平洋戦争開戦の年、著名彫刻家・朝倉文夫氏作、和氣町制30周年記念に町に寄贈。広虫像は備前焼・細工物作家として著名な伊勢崎陽山氏作で、1953年、地元婦人会の願いによる作品。世界大戦後である。

## 間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる  
1951年 岡山県立操山高等学校卒業  
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業  
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員  
1973~2006年 同上館長  
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講  
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講  
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

## 間壁葎子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる  
1951年 岡山県立操山高等学校卒業  
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業  
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)  
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員  
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)  
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授  
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

間壁先生、ご夫婦で歩まれた研究の歴史のご連載をありがとうございました。来年からは工業普通先生のご連載が始まります。お楽しみに。 編集部

隔月連載です。次回は山本曜久先生です。

## リレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 223

## 八ヶ上遺跡 ～埼玉県富士見市

齊藤 麻那

埼玉県富士見市は、県の南東部、首都30km圏内、東武東上線池袋駅から約25分に位置し、東は荒川をへだててさいたま市に、北は川越市、ふじみ野市に、西は三芳町に、南は志木市にそれぞれ接しています。面積は19.7km<sup>2</sup>、人口は約11万3000人です。

市域の東半分は荒川によって形成された標高6mほどの荒川低地が広がり、西半分は標高20mほどの武蔵野台地が広がります。この台地の縁辺部は、低地に注ぐ小河川と湧き水の浸食作用によって大小の谷が入り複雑な地形を形成します。市内で確認されている遺跡は59ヶ所ありますが、そのほとんどはこの台地の縁辺部に集中しており、旧石器時代から近世にかけての遺跡が確認されています。荒川低地では川沿いに形成された自然堤防上を中心に弥生時代・古墳時代・中近世の遺跡が確認されています。

その中で、今回私が紹介するのは、八ヶ上遺跡です。富士見市のほぼ中央を南北に流れる新河岸川の支流である江川と、唐沢堀の合流地点の武蔵野台地上に立地しており、遺跡は南北方向に細長く伸びていますが、そのほぼ中央を東武東上線の線路によって分断されています。30年ほど前までは地名の由来となった八ヶと呼ばれる湧き水がありました。

八ヶ上遺跡が最初に調査されたのは、昭和48年(1973)で、それから現在までに20ヶ所以上の調査が行われてきました。その結果、旧石器時代の石器集中、縄文時代草創期の遺物集中、早期の炉穴、前期・中期の竪穴住居跡、集石等が確認されています。

八ヶ上遺跡といえば、縄文時代草創期の遺物群が注目されます。草創期の遺物は3地点から出土していますが、中でも昭和48年(1973)に発掘調査が行われた第2地点からは、隆起線文土器とそれに伴う石器群が出土しました。第2地点は、八ヶ上遺跡のなかでも南側に位置しており、調査時には約420m<sup>2</sup>ある調査区の全域の調査がなされました。

草創期の遺物が出土した他の2地点も、第2地点と同様に遺跡の南側、江川沿いの台地東縁にまとまって位置しています。出土した隆起線文土器は、極細い粘土紐を貼り付けた後で整形する貼付手法によって製作されており、隆起線文土器の中で

も比較的新しい段階のものとなっています。また、それより後に位置づけられる爪形文土器や多縄文土器といった草創期の中でも新しい段階の土器も出土しています。

これらの土器に伴って尖頭器、小型の有茎尖頭器や大型石鏃、約400点の剥片類が出土しました。有茎尖頭器は小型のものが多くを占めるのに対し、石鏃は大型で重量のあるものが目立ちます。このように、小型の有茎尖頭器と大型石鏃が共存する点が八ヶ上遺跡草創期石器群の大きな特徴といえます。これらの製品のほかにも、未成品が確認され、特に大型石鏃と考えられるものの未成品が10点ほど出土しました。それと同時に、剥片・碎片もまとめて出土し、その中には尖頭器や石鏃を製作した際に出たと思われる調整剥片・碎片も含まれていました。また、これらの狩猟具を観察したところ、使用された際に生じる衝撃剝離痕のある石器が一つも見つかりませんでした。これらの製品・未成品が使用されずに出土した点、それに伴うと考えられる調整剥片・碎片が見つかった点、住居遺構が発見されなかった点などから、八ヶ上遺跡は石器の製作遺跡であると考えられます。

使用された石材は、チャートが一番多く、他には珪質頁岩などの武蔵野台地周辺で採取することのできる在地系石材がほとんどを占めています。黒曜石製の石器は約60点出土し、その内訳としては石鏃6点、削器2点のほか、剥片類が出土しており、全て小型の石器であることが確認されています。産地分析の結果、信州系、神津島系、畑宿系の黒曜石が出土していることが判明し、なかでも信州系黒曜石が39点と半分以上を占めていることがわかりました。武蔵野台地周辺を移動し、在地系の石材であるチャート等を使用しながら、一方で広範囲を移動し、石器の材料として良好な黒曜石も利用していたことがわかります。

このように縄文時代草創期の遺跡としてよく知られる八ヶ上遺跡ですが、第2地点の報告は概報が出ているのみで、本報告は完了していません。現在資料整理中ですが、本報告にはまだしばらく時間を要します。もう50年ほど前に発掘調査が行われた遺跡ということもあり、課題は多くありますが、少しずつ地道に資料整理を行っていこうと思います。

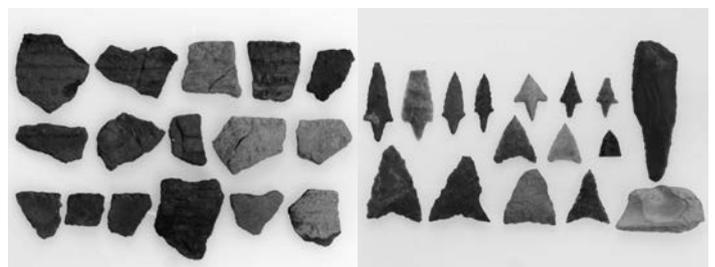
#### 参考文献：

富士見市1986「富士見市史 通史編 上巻」富士見市教育委員会  
 富士見市1986「富士見市史 資料編2 考古」富士見市教育委員会  
 富士見市教育委員会1974「富士見市文化財報告」第7冊

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは小林萌絵さんです。



▲第2地点調査時の様子



▲出土した隆起線文土器とそれに伴う石器群

## 考 古学者の書棚

## 「縄文人は海を越えたか? 「文化圏と言葉」の境界を探访する」

水ノ江和同 著/朝日選書1028(2022)

鯉淵 義紀

昨今、「縄文ブーム」といわれ、博物館の企画展でも講演会等でも縄文をテーマにしたものを多くみかけるようになった。しかし、縄文時代の境界、範囲ということについての理解は、曖昧なものを含んでいるのではないだろうか?一般的には地理的に日本列島と重なり、縄文土器が使われた範囲を縄文文化の境界と理解されている。しかし、本書のなかで述べられているように縄文人は周辺島嶼には、丸木舟という交通手段しかないにもかかわらず、果敢に渡航している。しかも、島に資源を求めて渡航するのではなく、危険を冒してまで渡航する理由が見当たらないような小規模な島々にも渡航しているというのである。これに対して、これまで縄文文化の起源に関して問題となってきたサハリン、朝鮮半島などは、列島内からでも島影が望めるにもかかわらず、交流の拠点をもつこともなく、多少の往来があったことが確認できる程度であるという。

それでは、日本列島島嶼間を自由に航行しているにもかかわらず、大陸まで及ばない理由は何なのであろうか。本書でもその間の事情を探ろうと、これまで大陸とのつながりが考えられる玦状耳飾、石刃鏃、朝鮮半島の土器との類似性から交流の証とされた曾畑式土器について考察されている。

玦状耳飾は中国に存在する「玦」という耳飾りとの類似性が柴田常恵によって100年前に命名されて以来長い研究史をもつが、大陸起源ということは定説化しているものの、どういったルートで日本に伝来し、縄文時代前期という時期に定着したかについては、未だに不明のままである。

石刃鏃は縄文時代早期後半の北海道東部に出現する遺物で、アムール川下流域からサハリンを経て、北海道に伝来したものとされた。しかし、日本国内では北海道東部でしか出土していないことからその系譜関係の追求に関心がとどまり、縄文人の交流往来という点については全く不明である。

九州の縄文時代前期の所産である曾畑式土器は韓国の櫛目文土器との類似性と胎土に滑石を混入する共通性から朝鮮半島との関係性をもつ土器として注目されて、朝鮮半島内でも出土例が認められたものである。しかし、曾畑式土器の先行型式の検討から轟B式→西唐津式→曾畑式の系譜が確認され、韓国の櫛目文土器との関係性については明確にできなかった。また、曾畑式出現後に結合式釣針が西北九州と朝鮮半島東南岸で認められることから交流の証とされたが、朝鮮半島内での出土例が少なく、交流というイメージからは程遠い状況が明らかとなってきている。

以上のように大陸系譜と考えられる遺物はいずれも伝播ルートが明らかでないことから、縄文文化の影響が及ばない範囲であるとみられ、ひとつの文化的境界が存在しているものであろう。こうした状況の成立要因を著者は「文化圏と言葉」に起因するものとしている。言葉による意思疎通の可否が文化圏の境界をつくるというのである。こうした考え方のなかで問題となるのが、著者も認めているように玦状耳飾の存在である。確かに伝来ルートは不明であるが、形態上中国に起源をもつこ

とは間違いないとされ、言葉が通じないことが、文化圏の境界を意味すると考えると、なかなか具合の悪い存在である。

言語の不通が文化圏を分けたと考えた場合、方言的な言語の差異をどう理解するかという問題もある。日本の中世社会にあっては、鹿児島と青森の武士同士がお互いの言葉が通じず、武士の間で普及していた能の言い回しで互いの意思疎通に用いたという逸話にもあるように、列島内でも言語の差異が際立っており、縄文時代の土器型式が一つの文化と考えた場合、その使用する言語にも方言的な差異が表れていたと考えられる。しかし、列島内では土器型式間の交流は激しく、中期後半では折衷土器という概念も現出する。特に中期から後期にかけての北陸地方などは複数地域の土器が混在して変遷している状況が認められ、言語の不通は交流の障害とはなっていないようなのである。それでは文化的境界を分けるものは何なのであろうか。

一つの考えとして朝鮮半島やサハリンの文化は、異質な文化とする情報がすでに縄文人の認識なかにあり、そこへ渡航するというにはある程度の覚悟が必要であったという理解は如何であろうか。そこに島影が見えても渡航しない理由、すなわち文化圏の境界というものが厳然として存在していたと考えたいのである。確かに文化圏の境界という場合、かつて藤本強が指摘したように「ぼかし」の文化エリアというものが存在し、相対する文化圏の要素が混在する範囲というものがある、相互の緩衝地帯が存在する。これは近世以降の幕藩体制下にあつて厳格な国境を形成していたなかでも国境付近では両国人が往き来していた事実が認められ、厳格に文化を分けることが難しいことと共通する事象とみられる。こうした文化的緩衝地帯にあたるのが、朝鮮半島南岸域などではないだろうか。往き来はあってもそこに交流が生まれにくいのは、文化的緩衝地帯であるからこそもいえる。本書のなかで著者が「交流」と「往き来」という用語の定義を厳格化して「往き来」という表現で縄文文化の境界について考察を加えている点は、この間の事情を探る上でも卓見である。

また、文化圏というワードを通婚圏と同義と考えた場合、文化的要素が相対する事象を持つ場合、婚姻を結ぶ相手が属する文化事象の差異を消化できないために地理的に近くてもそこに交流は生まれにくいのであろう。

本書を通読すると、縄文時代の文化的範囲を考えると「交流」と「往き来」の違いを明確にすることが、縄文文化を正確に理解するうえで重要であると実感できる。それには地道に個々の出土遺物の検討を積み重ねていくほかはない。

参考文献：藤本強ほか1982「縄文文化の研究6 続縄文・南島文化」

## アルカ通信 No.230

発行日 2022年11月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp